

“ みんなで守ろう、わが家(や)、わが町、わが学校 ”

2008年7月13日 NPO法人設立「2周年記念防
災研修会」



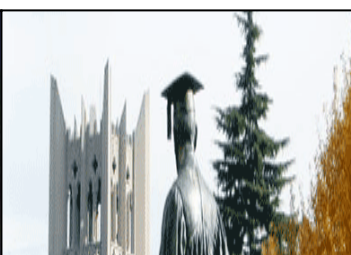
川口市立川口総合高校



川口市立看護専門学校



川口市立医療センター



早稲田災害対策学生チーム

協力：川口市災害対策室

主催：特定非営利活動法人 川口市民防災ボランティアネットワーク

代表理事 大羽賀 秀夫

TEL:048-294-4830

URL <http://www.kawaguchi-bousai-net.jp>

会場：川口市立中央ふれあい館

7・13 NPO 法人設立「2周年記念防災研修会」

趣旨

「地域防災力」の向上に寄与する。

次世代を担う若者たち（生徒・学生・医療関係者など）に、この機会に「防災意識の向上」と「減災」についての取り組みを改めて考えてもらいたい。

向こう30年間で想定される大きな地震などの災害時に、助ける側の立場としてその役割が大きく期待されている。

10年20年後に、自分はどこに住むか分からない。どこに住んでも安心・安全な街づくりを進めなければならない。

（代表理事 大羽賀秀夫）

研修会プログラム

基調講演	ページ
「尊い命を守るために」・・・・・・・・・・・・・・・・	3
阪神淡路大震災における、被災地事情と生かすべき教訓を学ぶ	
講師：高橋民夫氏（文化放送防災キャスター）	
パネルディスカッション	
コーディネーター：高橋民夫氏・・・・・・・・	7
パネリスト	
：上山健三氏・・・・・・・・	
：藤田利久氏・・・・・・・・	
：大澤サユリ女史・・・・・・・・	
：大羽賀秀夫氏・・・・・・・・	
生徒・学生・医療関係者とQ & A	
市立川口総合高校・・・・・・・・	16
市立看護専門学校・・・・・・・・	19 27 30
早稲田大学災害対策学生チーム・・・・・・・・	24
市立医療センター・・・・・・・・	28

（記録者：副代表理事 小田恒雄）

防災研修会まとめ（要旨）

開会挨拶

大羽賀秀夫さん

参加された皆様は、国民の代表とでもいえる防災意識の高い人たちです。

本日までご参加された皆様方は防災に関心が高く、この先大きな災害が起きた時にいろんなお力を発揮して頂く、いわば国民の代表というかそんな感じで思っておいて下さい。

かわぐち防災ネットは、2周年を迎えました。（川口市民防災ボランティアネットワークの略称）

当団体は、法人として2年となります。準備期間をいれますと4年となります。

「いざ」の時に役立つ団体として、防災分野のネットワークを広げる活動を行っております。

研修会は、具体的で有効な内容にしたいと思っております。

本日は、バラエティーに富んだ幅広い分野で活躍されている皆様をお招きしての「防災研修会」です。お話は、できるだけ具体的にしかも有効な内容にしたいと考えておりますので、ぜひ会場の皆様には、お話の中身を今後にお役立て頂きたいと思っております。

来賓挨拶

上山健三さん

かねてより、川口市は「日本一のボランティアのまち」を目指しています。

現在、川口市に登録ボランティア団体数は、200を超えていると聞いています。

主催者の「かわぐち防災ネット」さんは、川口市の「地域防災計画」に対して、いろいろと協力を頂いておるところであります。

これまで「災害時要援護者訓練」「外国人対象の防災訓練」「川口市総合防災訓練」に参加して頂いております。

現在、地球は活動期に入っており実災害への備えをしっかりと進める必要に迫られています。

いわゆる「自助」「共助」を超えて「協働」の体制づくりの段階を迎えている。

もちろん地域によって、その取り組みレベルはまだまだ温度差がありますが。

想定されている首都圏直下地震は、向こう30年間でその発生確率は70%であります。

川口市に被害が大きく影響する「東京湾北部地震」では、一瞬のうちに家屋倒壊4000棟、死者1500人が被害想定されています。

川口市では、減災（被害軽減）を目指し平成19年度「風水害編」と「震災編」ということで「地域防災計画」を大幅に改定しました。また、平成20年度では、これに「特殊災害」と「大規模火災」に対し取り組みを強化しているところです。

「防災計画」で求められているポイントは、先ず「自助（自らを守る）」をしっかりと行って頂く
自分が助かったら、次に「共助（隣の人を助ける）」をして頂きたい。

行政は「公助」として、「自助」「共助」の取り組みを支えて行きます。

この「自助」「共助」「公助」の3つの取り組みを明確にしました。

大規模災害に備えるこの3つの取り組みは、「訓練」「研修会」を通じてしっかりと
検証して行く中で、平常時から基礎知識をぜひ身につけてもらいたいのです。

災害が発生するといわゆる「避難所」が必要となります。

川口市は小・中・高校の80校が地域の拠点として避難所となります。

そこで避難所となる学校の「耐震」はどうか言えば、中国四川大地震から国の方針で学校の「耐震化」の取り組みを早めることになりました。

東京都あるいは埼玉県で「震度5強以上」の地震が起こったら自動的に学校は避難所となり、またその学校の近くに住んでいる市役所職員が運営に当たる。但し3日間でその後は住民が主体となって運営に当たることになっています。

川口市の中でも、既に避難所開設マニュアルを作成し検証をしている学校、これから作成の学校と取り組みにかなりの温度差があるのが現状です。

今年8月の「総合防災訓練」においては、「上青木小学」「青木中学」「総合高校」の3校が避難所対象として「開設訓練」を行うことになっています。

先ず座学を行い、次に実際の訓練をしながら「避難所開設」の仕方を覚えてもらいます。

「防災」に対する意識を高めて、いわゆる防災の「スイッチ」を入れて頂きたいのです。 災
害後も変わらぬ人生を送って頂く、その為の「スイッチ」を入れ替えて頂きたいのです。

基調講演「尊い命を守るために」 - 過去の教訓に学ぶ -

講師：高橋民夫さん

（活動略歴）

「在京ラジオ災害情報担当者会議」の中心的立場で活躍されております。
特に首都圏の大規模災害時に備え「ラジオライフラインネットワーク」を構築し、1996年以来「いざ」の時に備え同時生放送「ラジオ災害情報交差点」という被災者向けの番組を毎年2回（1月と9月）継続されている。
2007年この活動が社会的功績が大きいと評価され、日本災害情報学会で団体部門で表彰されています。

「ラジオライフラインネットワーク」の構成メンバーは
ラジオ7局：NHKラジオ、TBS、文化放送、日本放送、ラジオ日本、エフエム東京、J-wave
ライフライン5社：東京電力、東京ガス、東京都水道局、NTT東日本、NTTドコモ
文化放送の防災キャスターとして災害時関係情報を正確でしかも、いち早く「被災者のもとに届ける」をモットーに30年間務めて来られました。

（講演概要）

先ほど、上山さんから「スイッチ」のお話がありました。

防災意識を高めるための「スイッチ」を入れてください。と

会場の皆さんの中でこれまでに自分が大きな災害の中に身を置いたことのある人はおられませんかと尋ねたら

昭和21年「昭和南海地震」を体験した方がおられた（小学1年生の時に体験）

昭和南海地震（M8.0）（和歌山県潮岬南南西沖（深さ24Km）

1946年（昭和21年）12月21日 午前4時19分 発災（高知、和歌山、徳島県で被災）

自分が「大きな災害に遭遇する」という事は、どういうことなのか。

災害に遭遇するという事は、いつもと同じ日常的な時間が流れている中である時間で突然、自分が非日常の中に置かれてしまうことなのです。

阪神淡路大震災（1995年1月17日（火）AM5:46発災）

冬の神戸の夜明けは7時0分頃でした。地震直後は自分の家が大丈夫であった人は窓から見える外の建物が倒れその光景を目の当たりにしても、その多くの方は、いつものようにバッグを持って「さあー仕事に行かなければ」と行動する人が何人もいたという事です。

誰もが日常と非日常のスイッチがうまく利かないでオロオロしてしまうのです。

今までに経験したことのない都市型直下地震であり、発災して2～3時間経っても、まだ日常の行動を取るか、非常事態の行動を取るかの判断がつかかねる人たちが多かったのです。

つまり自分の目の前に起こっている大変な状態を認めたくない、何かの間違いであって欲しいという意識が働いている。そして、そういう人が多かったのです。

現状認識ができる迄、人によっては数十秒から数時間というタイムラグがあるのです。

大切な事は日頃から非常事態が起きたらどうするか、シュミレーションしておくことです。

a.どんな非常事態が起きるかあらかじめ想定しておくこと。

b.いつもなら使える手段が使えなくなる、ということを考えに入れておくこと。という事でここで皆さんに心をこめて言いたい事は、自然災害に対する心構えとして

「災害はいたずらに怖がらないこと。正しく恐れる（畏敬の念）こと。」です。

そして、その備えをきちんとすることです。

いかにして、自然との共生を図っていくかが大事なのです。

さて、テーマである「尊い命を守る」ということは

突然、災害に見舞われた時に「近くに顔を知っている人がいる」「助けあえる人がいる」ということが「大切な命を守る」ことにつながります。

ですから、見知らぬ人との「出会い」は大切に顔のわかる間柄をつくるのが防災の基本と言えるのです。

ということで、たまたま席が隣り合わせとなった方とここで握手をしましょうね。（握手）

1995年1月17日（火）AM5:46 阪神淡路大震災が発災。

「情報」が無いことが「情報」なのです。

その時、高橋さんは、東京の文化放送四谷のスタジオで朝5時からの生放送の最中でした。

スタジオのコンピューター画面に地震情報が逐次流されたので状況は次第にわかったが、最初から最後まで「神戸」の情報は流れなかった。

あとでわかったことですが、神戸からの情報が32分間途絶えていたのです。

災害が大きければ大きいほどそこからの「情報が上がってこない。」ということでした。

ラジオ関西（兵庫県神戸市須磨区）の、当時の生放送テープが会場に流された。

プロでも一瞬パニックに陥る。

当日の朝、「AM神戸558」として録音テープの放送中に地震に見舞われた。

5 時46分地震の揺れにより、流していた収録テープの放送を中断して、女性のアナウンサーが地震発生を伝え始めたが、最初は声が上ずっているのが聞き取れる。

女性アナウンサーは緊張してマイクに向かい「しゃべりましょうか」の声と酸素欠乏症のように息遣いが苦しそうになっている。(緊張した空気が感じられる)・・・その後オンエアーのOKが出されると女性アナウンサーは、いつもと違う甲高い声でしゃべりはじめます。

(録音テープ)

「はい、AM神戸のスタジオです。スタジオが現在只今の地震で壊れております。音声途絶えております。只今の地震のためオンエアーが途絶えております。情報が入り次第お伝えして参ります。」

「こちらは、AM神戸558です。只今の地震の影響でオンエアーが、放送が届きにくっております。情報が入り次第お伝えして参ります。」

「少し～(この間の声が聞き取れない)～、どうぞ皆様落ち着いて、ガスの元栓など確認なさって、火の元も確認なさって、落ち着いて行動なさってください。」

「こちらは、AM神戸558です。神戸市須磨区にありますラジオ関西の外に出ますと、たくさんの方が外に出て来られています。」

ラジオ関西の男性が外からスタジオに戻って来られてマイクの前で

「いま、外から帰ってきました。AM神戸のまわりのマンションが崩れ住民の方々が不安でここに出てきておられました。」・・・放送テープはここまで。

講師：高橋民夫さん

あの大きな地震が発生した時は、たまたま録音テープが流れていた時だったからで、パーソナリティがオンエアー中だったらきっとあの突然の揺れで“ワー！”とか“キャー！”とかの叫び声を発したものだと思われます。

それは、仕方のないことで、だれしも一瞬“パニック”に陥るのです。

プロのアナウンサーでもその瞬間“気が動転”していたということです。

そのうち少し長い言葉がしゃべれるようになった時に、普段の自分に立ち戻ったのです。

つまり、「その時」自分が「何をすべきか」が分かっていたら、或は「何をすべきか」を思い出したからこそ普段の自分に戻れたということです。

自分の取るべき行動を思い出した時に、落ち着きを取り戻したのです。

このことは、「危機管理上」とても大事なことなのです。

初動体制として、「取るべき行動は何か」を身につけておくことが大切です。

そのためには、1日1回「こんな時に地震にあったらどう行動したらいいか」を思い浮かべてみることです。

「尊い命を守るために」どうしたらいいのか。

先ず、過去の多くの教訓を知ることです。

福井地震 1948年(昭和23年)6月28日(M7.1) 午後4時13分

直下型の断層地震で福井平野周辺の限られた範囲における被害が甚大であった。 この地震

を期に気象庁震度階級に「震度7」が作られた。(それまでは震度6が最大)

死者数の分布が都市に集中した。(死者数3769人、倒壊戸数36184戸、焼失家屋3851戸)

農村地区が100%全壊地区が多い割に死亡者数が比較的少なかったのは農作業で外に出ている人の割合が多かった。

重傷者本人の受傷後の20時間の動向

加藤恒勝氏(福井地震で被災受傷され生き残った当人の手記)

<http://toshichan.be.fukui-nct.ac.jp/yoshida/works/earthquake/kato.html>

手記抜粋

受傷後20時間とは、当受傷者が災害地の異常な状況下に置かれていた時間である。 この時間内の動向が生死を分けたと考えられる。

～関東大震災のとき「腕を切断」して救出された者があったという話を、ふと思い浮かべる。～「腕切断」を決意し、ひとり残っていた映写技師にその旨を伝える。彼は了解し、切る物を取りに走り去る。・・・手記は続く。

11.余録(「幻肢」(ファントム・リム)について

～ところが、月末のある日、断端に妙な痛みを感じた。寒くなったのでうずきの前兆かと思った。がそうではなかった。かゆいのである。しかも「存在しない腕のあたりがかゆい。」気味のよくない気持ちだがかかって読んだ長井隆博士の随想の中の一場面～。

「過去の災害の教訓は、防災の教本である。」

過去の多くさんの災害から、さまざまな生き残りのための教訓を学ぼう。

高橋さんが、いつも持ち歩いている防災の3点セットとは

a.笛（ホイッスル）：助けを呼ぶことができる。

暗闇の混乱の中で、笛を吹き大きな声で「みんな大丈夫か! 」と声をかけるだけで被災者の気持ちを勇気づけることができる。リーダーシップがとれる。

b.ミニライト（自分の手元を照らす）：命を守る光だ（明かりは安心感を生む）

c.ラジオ：最新の情報を得る（デマから身を守る）

パネルディスカッション テーマ：「今、私たちにできること」

コーディネーター：高橋民夫さん

ここで、パネラーの皆様にも、現在の活動状況などを含め自己紹介をして頂きます。

はじめに、上山さんからお願いします。

上山健三さん

特に若い人たちに、防災への関心を持ってもらいたい。

川口市として、市民の中から地域の防災リーダーを育成して行きたいと取り組んでいるが若い人たちの参加が非常にすくない。

現在、西中学生をはじめ50～60名対象に活動をしており、高校では総合高校をはじめ「学校行事」やクラブ活動の中で「防災活動」を取り上げてもらうように苦慮しているところであります。

この研修会を注目しています。

今日は、若い人たち（高校生・大学生・看護学校生・医療センター）から防災活動に向けての「対策の案」が出ればいいなと期待しております。

藤田利久さん

実は、今日ここに来るのが恥ずかしかったのです。

なぜかといえば「早稲田大学（災害対策学生チーム）」や「専門学校生」や「総合高校」さんは、ボランティアであろうとも災害教育或は災害支援ということについてすごく関心をお持ちだと思います。

防災に対する大学の関心は、まだまだ低いのが実情。

今のほとんどの大学生は、「災害」に対する関心はあっても何かの行動に移していることはほとんどありません。と同時にでは大学がそれに取り組まなければならないかと言えば、教職員も「災害」に対する関心は全くありません。これはお恥ずかしいお話です。

「校舎1万棟6強で倒壊 文科省調査 耐震化には1兆円」・・・藤田さんが新聞の記事を配布。
国は、改正法で補強工事の自治体負担は約1割にまで軽減された。

渡海文科相は20日、「1日でも早く促進されるよう、一層努力をしていく。（危険性が高い1万棟は）原則3年以内で取り組んで欲しい」と述べた。（6月20日朝日新聞）

大学は地域のコミュニティの拠点に。

今後、学校は地域のコミュニティの核になって中心的な役割を担わなければならない立場にあります。教職員が担うのではなく、やはり学生が中心となることが大切です。

先生や職員の「災害ボランティア」に対する受け止め方は、まだまだ低いのが実態です。

この先、大学として対策して行きたいと考えています。

大学1年生（教員養成コース）に実施した「防災に関するアンケート」の結果

Q.「災害」といえば、何を連想するか。

97%は、災害=地震と受け止めている。 91%は、火災を心配している。 60%は、台風・土砂災害を心配している。

Q.「防災」といえば何を連想するか。

82%は、「避難訓練」次が「非常食」「消火」「防災ずきん」「消防車」などとなっている。幼稚園、小学校、中学校、高校において「訓練」したことが結果に出ている。

この事からいえる「大切」なことは

学生さん達に、いかに「防災に関する体験をさせるか」ということであります。

この面においては、消防署や行政にも支援をお願いすると同時に、私たち大学の立場としても取り組みを活発かさせて行きたいと考えております。

コーディネーター：高橋民夫さん

会場の皆様の中には、「ボランティアをしたいと思うが、どうしたらいいのか。」とお思いになっておられる方もあるかと思えますし、事例や参考になる点を含めてディスカッションを進めて行きたいと思えます。

実体験をお持ちの大澤さんには、普段の活動を含めてお話を頂くことにします。

大澤サヨリさん

人から「普段は何をしているのですか」とよく尋ねられます。

私は、普通の主婦です。普段は仕事もしていますし幼稚園に行く子の子育てもしています。

そして、日頃の生活の中で「ふっ、と思う」ことがあります。

何かあったらどうしよう、困ったことがあったらどうしよう。と思う。

住んでいる上尾市で何か起こったらどうしよう。

「私たちの町を守る」という時の、「私たちの町」とは、一体「誰の町」を指すのか。その時の私は、果たして「何を」行動すればいいのか。

また、子供を守るために、「何を」したらいいのか。

私の命を守るものは「自分自身」、次に守るのは「家族」。では、どうしたらよいか。

「誰かの」ために、「何が」できるか。

そして、被災地の「誰のために」「何が」できるか。を考えています。

参加されている若い皆様は、これから多くの知識や体験を積んで頂き、いずれの日か今お座りの席が変わり、お話をされる側の席に座られることを期待しております。

「災害ボランティア」にたずさわる人の大切な「心得」について

「ボランティアの心得」・・・大澤さんが災害ボランティアセンターに貼ってあるチラシを持参し会場で配布。

熱い気持ちを持って「被災地」に出向き、熱心に現地でボランティア活動されたあげく、心ならずも体調をこわして帰られる人がおられます。また、不幸にして命を落とされる人もいます。仲間として、とてもつらいことですが残念なことです。こうしたことがないように体調の自己管理は、とても大切なことです。

尚、私は16歳から災害ボランティア活動に従事し、現在に至っています。

コーディネーター：高橋民夫さん

では、ここで大羽賀秀夫さんにお話して頂きます。

NPO法人の代表であり、川口市が抱える4人に一人がマンション住まいという「マンションの問題」や地域の「連絡網づくりの問題」などいろいろと提起をして頂き、また、団体の現在の活動などについて触れて頂きます。

大羽賀秀夫さん

何を考えるべきか。

私は、一級建築士であり建築家であります。会員の中にも何人か一級建築士がおり本日も参加しております。かわぐち防災ネットの活動の中で、建築士としてどうあらねばならないかという点で今日までの私の活動をお話しさせていただきます。

今から13年前の「1995年1月17日 阪神淡路大震災」の神戸に、3日目に入り被災現場を目の当たりにし、建築家として信じられない光景が多く目に入りました。

これまで建物が、こんな形に壊れるわけがないと思っていた。

1994年1月17日米国の「ロスアンゼルス・ノースリッジ地震」で起きた「高速道路高架」倒壊が日本で起きるわけがないと思っていた。

マスコミは連日「絵」になる場面を報道していたので、私は「絵」にならない場所を知りたかったので探してその建物の下に潜り込んだりして、朝6時から夜8時まで須磨から西宮地区を自転車で、夢中で走りまわった。

建物の鉄骨手抜き、鉄筋強度不足、木造のシロアリ防虫不足、大工の腕の拙劣さが、やたら目についた。

人間がつくる技術の限界を知らされると同時に、信じられない被災現場を見た結果、建物をつくる造り手として、「それぞれの考え方」「それぞれの造り方」に基づいてどこまでやったのかが厳しく問われていると痛感しました。

被災現場における悲しみと怒り

須磨学園近くの被災現場での光景

救出作業にあっていた自衛隊がそこにはもう人が埋もれていないとして引き揚げたが地元の住民の人たちが「いや、ここに居るはずだ」といって崩れた建物の天井をはがしながらなおも懸命に救出作業を続けた姿を見て、私は、涙がでて止まらなかった。

(探し求めていた人は、見つかったが、すでに亡くなっていました。)

菅原市場の焼け跡での光景

火災で多くの命を失った場所で線香をたむけ両手をあわせて拜んでいる家族にたいし、真っ赤なジャンパーを着たマスメディアのアナウンサーが無神経にもインタビューのマイクを突き付けている光景を見て、とても許せない気持ちでした。

つまり、平常時ではない状況の下での対応ができてないということです。

私は、福岡県西方沖地震(2005.03.20 M7.0 最大震度6弱)を除き、その後の地震被災地には全て出向きました。

建築家の果たす役目として

この度も15日の朝到着予定で、「岩手・宮城内陸地震」被災地に行きます。

建物被害は少ないですが、建築家の役目として現地で一番必要な「人心の安寧」「人心の安定」のために出向きます。

被災者の「心の混迷」に応えるという体制づくりを市民の手で。

建物被害に対しては、お金があれば建て替えもできますし、壊れない建物にすることもできますが、被災をした現場の状況と、家族を失い家を失い「自分たちの生きざまや生きる望みを見出せない人たち」に対し、行政や公的な支援を当てにするのではなく市民が市民の心で応えていくという体制を作らなければ、この「心の混迷」から抜け出す事はできません。

震災で受けた心の傷は、未だにかわらない。

小学1年で阪神淡路大震災を体験、両親を亡くした男の子は、未だに「地震」の話ができないでいます。(PTSDの恐さです。)

市民だからこそできる活動とは

2006年5月「かわぐち防災ネット」が研修で被災地「神戸」に行きました。

震災のため目の前でお子さん二人を亡くされたご両親が、ひたすらガレキの中を掘り返しガラスの中を素足で見つけ出そうと探しまわりました、と体験談をお聞きしました。

そして、このお話も9年経って、初めて話す事ができた。ということでした。

その「心」に対し、市民でしかこの労苦に対して応えられない事がたくさんあると思います。そのために私は、「かわぐち防災ネット」の活動をしてきたのです。

今後「市民レベルの向上」「全体の向上」を図るには、どうしたら良いのか。

非常に難しいこともたくさんあります。

行政のリーダーのもとで、私たち市民が主体的にどう関わっていくのか。

阪神淡路

大震災後13年にしての道といえます。

そして、たったいま起るかも知れない「地震」に対し、「今、何ができるか」を問いかけて行くのが私たちの活動です。

コーディネーター：高橋民夫さん

私が最初にお話しましたように、「災害をいわずに怖がらない。」けれども「正しく恐れる」ことが大切です。

阪神淡路大震災で「自分の家に殺されてしまった」という言葉は言いすぎかも知れませんが被災現場では、そういった現象がいっぱいあったのです。

神戸は多くの若い学生さんたちも犠牲になった。

高齢者が多く亡くなったといわれた阪神淡路大震災で、当時、神戸は学生の町でもあったの

ディスカッション タイム

コーディネーター：高橋民夫さん

次に上山さんにお尋ねします。

中国四川大地震で多くの学校が倒壊して、たくさんの児童・生徒さんが犠牲になりました。川口市に於いては、この「学校の耐震化」についてどのような取り組みになっていますかお聞かせ下さい。

上山健三さん

非常に難しい話題に入ってきましたが、「学校の耐震化」については、川口市は最優先事項として取り組んでいます。

できるだけ早目に全ての学校の「耐震化」を図って行こう、あるいは「建て替え」をして行こうという取り組みをしています。

目標年次よりも早めに完結させようと国を挙げて見直しが来ておりますので、もう少し早めになるだろうと思っています。

実際に中国四川大地震（M 8.0）と同じような内陸の大きな地震が発生しますと、日本の学校も壊れる可能性はなくはない。あります。でもあの規模の内陸の地震は日本の国内では発生しない。M 8.0 以上の強さというのは、海溝型で日本では発生します。内陸では、もっと小さい（M 7.2）とか（M 7.3）。学校が一瞬のうちにつぶれるようなことはおそらく発生しない。

但し、落下物はある。と思います。

現在、川口市では「地震防災ハザードマップ」を作成し、今年度中に全戸対象に配布していきます。この中には学校も全て入っていますが地震で倒壊する学校は、1校もありません。いわゆる「東京湾北部地震（M 7.3 震度6強）」を想定している。落下物はあるが、一瞬のうちに「命」をとられるような倒壊はない。と見ています。

コーディネーター：高橋民夫さん

それに付け加えさせていただくと

「大きな地震災害が発生した」そうすると住民は先ず「避難」という事を思い浮かべてしまうかも知れませんが（これまで「防災訓練」が「避難訓練」という事で、行われてきたために。）

地震が起こっても、自分の家が大丈夫であれば、「家の中に残っててください。」という事をメディアの立場の者としては、広報して行くつもりです。

大羽賀秀夫さん

「すみません」少し補足させてください。

「中国四川大地震」の場合は、インド大陸がユーラシア大陸にぶつかってその歪みでできたヒマラヤの部分で逆断層状態で地震が起こりマグニチュードは、非常に大きい。

日本では海溝型でしか起きないよ、というのは、日本の歴史の中でM 8 . 0 を超えたのは「海溝型」しかなかったからです。ところが、「新潟県の中越」や「岩手・宮城の内陸地震」では、東北の山系をつくった逆断層型の地形なのです。中国四川大地震よりは、規模が小さかったが 但し、直下型であって今後どう起きるかはわかりません。

川口（安行台地）・浦和（大宮台地）は、東北の阿武隈山系のしっぽにあたります。決して恐れる事はないのは規模が小さいこととマグニチュードは最大でも7 を超える事はないだろうといわれています。

一番恐れている地震は先ほどから言われている東京湾深奥部地震（東京湾北部地震）です。直下型地震で、これは大きいでしょう。上山さんも「これ以上はしゃべれないぞ」という配慮でお話をされていると思います。

でも、実際の被害は予想通りにはいかないでしょう。と私は思っています。

その要因は、「地盤」に起因しているのです。「地盤」が全てを物語っています。

中国四川大地震の学校崩壊は、「地盤」と「建て方」に大きな要因があるといえます。

中国四川大地震では、過去(1976.7 .2 8 唐山地震 死者は2 4 万人規模 当時の記録が無い。)の大きな地震災害の検証がなされないまま今に至っているのです、教訓が生かされて無いのです。

コーディネーター：高橋民夫さん

では、藤田さんに学校の取り組みについてお話をして頂きます。

学校或は、学生さんたちの「学校同士の連携」は、どうなっているのでしょうか。

「地域の人たちとのつながり」の面では、どうでしょう。

藤田利久さん

現実には、避難所になっているのは、「公立」の小・中・高校です。

私ども「私立学校」は、避難所になっていません。

学校は、早稲田大学の生徒さんたちのように、地域のコミュニティの中で「核」となる避難所にして、その時に教職員や学生に対して「防災意識」を向上させなければいけない。と思っております。

コーディネーター：高橋民夫さん

藤田さんは「帰宅困難者」に対する企業の支援の在り方について、どうお考えになりますか。

藤田利久さん

行政はトップですが、地域にある全ての企業体が第一次的なヘルプとして、役割を果たさなければ
ならないと思いますし

緊急時の3日分の備蓄（水・食糧）を備えておくこと。

そして、これらの事を行政でまとめて頂ければいいなと思っています。

コーディネーター：高橋民夫さん

帰宅支援ステーションには、「情報」が置いてある。「水」がある。トイレをお貸しする一時休憩場所機能がある。ガソリンスタンド、コンビニ、ファミリーレストランなど。

「自助」とは、3日間は自分が生き延びるための備えをしておくこと。

「公助」は、およそ3日目頃から組織だった動きができることになる。

これらに関して、上山さん如何でしょう。

上山健三さん

とにかく3日間分は、備えて置いていただきたい。

特に大きな災害時には、「自助」として備えていない人が必ず居る。

行政は一定規模の備蓄をしているが、全てを満たせない。

「共助」とは、備えをしていない人がいる場合に、必要となる行動である。

残念ながら、これまでの「経験」から言っても100人中10人くらいが備えているようだ。

高橋民夫さん

被災地で「物資の取り合い」が起きないようにするには、「コーディネーターの役目は重要と思いますが、「避難所」や「災害ボランティアセンター」における体験をお持ちの大澤さんの意見は如何ですか。

大澤サユリさん

「避難所」の運営や「災害ボランティアセンター」の運営においては
a.山間部と都市部では、規模・人数・場所等が異なりますが、例えば、災害ボランティアセンターのスタッフの方が、地元の方・自治会の方だったりする。
地域における日頃の「お祭り」や「コミュニティセンター」でお互いが知りあっていると、例えば町内会長さんが来られない場合でも、次の人が代わりに中心となって、立ち上げがはやくできるし
b .センターの運営も普段から訓練や・情報伝達・話し合いが行われていると、スタッフ皆で自主的に行われるので情報は全体に行き渡る。
避難所において「おにぎり1個」が行き渡らないような事態は起きにくくなる。が運営がいわゆる、ワンマンだと意思疎通を欠き「物の取り合い」も起こりやすくなるものです。

コーディネーター：高橋民夫さん

大澤さんのこうした「体験談」は、大勢の人に知っておいてほしいし、今後、記録集にしたりして、ぜひ、広めて頂きたい。そして「いざ」という時に役立てて頂きたいと思います。

Q & A コーナー

コーディネーター：高橋民夫さん

では、ここからは「Q & A コーナー」に参加されている生徒・学生・医療関係の若い人たちを交えてお話を進めてまいりましょう。

若い人たちは、今、「何を求めているか」「どんな問題を抱えているのか」などについてパネラーの皆さんと意見交換をしていきます。

はじめに、川口市立総合高校（2名参加）からお願いしましょう。

Q：川口市立川口総合高校さん

JRC（青少年赤十字）部の部長を務めています。

JRC（青少年赤十字）活動とは、日本赤十字募金活動や校内ボランティアルーム運営などをおこないません。

自分たちは、学校でボランティアの募集があったときに興味のあるボランティアに参加しています。私は、清掃・ゴミ拾いが好きです。先週も川口駅前周辺を行いました。

Q：質問します。全部の学校にいえると思いますが、「学校の耐震構造」は、大丈夫でしょうか？

Q：また、大地震が発生した場合、学校はどういう活動に使われるのですか？

A：大羽賀秀夫さん

A：学校の耐震についてお答えします。

耐震診断は、3段階で行われています。現在は、第3次診断の段階にあります。

第1次診断：「目視」による「柱」の点検をおこないます。

既に終了、問題はありません。(10年前では、かなりアウトがあった。)

第2次診断：「柱」+「梁」の点検。

第3次診断：「柱」+「梁」+「床」+「壁」の点検。

現在は、第3次診断の段階にあります。

ということで、「瞬時の崩壊」は無いと思います。但し、使えるかどうかは、これからの診断結果によります。

A：地震災害の時は、学校がどう使われるのかについてお答えします。

体育館は「避難所」として使われるよう、耐震補強に入っています。

地震の際は、屋根や天井等の落下物の危険の確認をして置く事が大切です。

また、避難所（体育館）には、お年寄りや要援護者が入りますし、そもそも「避難所」には、「帰る家のある人」が入る場所なのです。

「帰る家のない人」が避難所に入ると、そこから出られなくなるからです。

私の考え方ですが、

避難所には、いずれ自分の住居に帰れる人がはいる所なのです。

なぜなら学校は、「教育をする場所」ですから一日も早く勉強ができる場に戻す必要があるからです。

(阪神淡路大震災の場合に、避難生活は長い人で、7ヶ月間もあった。)

(参考までに新潟県中越地震では、約2ヶ月間あった。)

神戸市のピーク時の避難者数は、24万人で、これは、全人口の16%に及んだ。

また、新潟県中越地震では、小千谷の避難者が一時26000人に達し、全人口の約62%に及んだ。

阪神淡路大震災の場合に、神戸のまちの避難所に、3000人が入りました。

川口市の場合、実際の災害時には、想定されている避難者数を超えるものと見ています。（避難所に入りきれない人が出ると思われる。）

学校 = 避難所という考え方は、変えなくてはいけないと思いますし、

私は「学校に代わる避難所」を作る必要があると思いますが、現在の川口市にはその考え方はありません。なぜなら、莫大なお金がかかるからです。

安全は確保されているかも知れませんが、ほんとうに生きた安全かどうかはまだわかりません。

コーディネーター：高橋民夫さん

では、上山さんの方で、補足がございましたらどうぞ。

A：上山健三さん

先ほど申し上げましたように、川口市の80校（小・中・高校）は全て、避難所となります。

「防災計画」で「避難所生活をする人」は、「火災で家がなくなった人」「倒壊で家に住めない人」などが入所することになっています。

「防災訓練」では、避難所生活がスムーズにできるように、開設・運営について時間を割いて訓練をしているところです。

学校は、必要な耐震補強に取り組みながら、安心できる避難所として地域の拠点づくりを進めています。

避難所を開設したら、学校の先生も住民の方々のお世話をします。が場合によっては市民の皆様にも開設・運営の支援をお願いするかもしれません。できる仕事は、して頂くことになります。

「避難所」生活は、3日間から1週間くらいを想定しています。

その上で、「家に帰れない避難者」には、空いているマンションとか県・市立住宅へ移って頂くことをシュミレーションしています。

発災して、半日程度で1500人くらいは「避難所」に入所すると想定している。

そこで、これを受入対応するのに、町会を中心に泊りこみで訓練をしているところです。

そうした訓練の中で、高校は「クラブ活動がある」という事で今年の総合高校では、宿泊訓練を取りやめております。

高校における宿泊訓練の在り方については、今後の課題として検討をして行くことにしております。

A：藤田利久さん

今、高校についてのお話がでしたが、大学については、少し趣が違います。

確かに授業は、進めなくてはなりません、私どもの大学の場合は、広い敷地と広いグラウンド・トイレなど施設があります。もちろん、耐震化も進めており、一応安全を確保しております。

但し、全てが開放できるかといえば、そうではありません（教室に薬品が置いてあり危険な区域があるなど。）一時の避難所にはなっております。

アンケート結果にもありましたが、ほとんどの学生が「災害時に落ち合う場所」を家族と話し合っておりません。

そうした中で、25%が「災害時に落ち合う場所を学校」としている。そのうちの70%は「どこで落ち合うか」「どこに連絡するか」「どこに避難するか」

しかも、そのうちの80%は通いなれた学校（近くの保育園・幼稚園・小・中・高・大学校）と答えています。

つまり、そうした近くの公共施設であれば、お互い行き来しているし、連絡も取りやすいという事がいえると思います。

そして、各学校は「災害時に使える連絡網」を備えているから。

コーディネーター：高橋民夫さん

続いて川口市立看護専門学校の皆さん（5名参加）にご質問をお願いしましょう。

Q：川口市立看護専門学校生さん

では、質問をさせていただきます。

災害時には、頭の中が真っ白になると思いますが、そうした中で

Q：災害時に医療従事者は、何を最優先に行えばいいのでしょうか。

Q：また、災害で被害にあわれた人の心のケアは、どのように接したらいいですか。

コーディネーター：高橋民夫さん

ご質問に対し、パネリストの中で、どなたがお答えになりますか？

A：大羽賀秀夫さん

かわぐち防災ネットの会員の中には、医療関係の会員もありますが、ひとまず私の方からお答えします。
前提として、先ず「自分自身の身の安全を確保する」こと。その上で

最初に行う事は「助ける側の人」を集める必要があります。

そのためには、**大声で「動ける人は、集まってください。」**と呼びかける。

誰かが声を出さないと、人の心をつなげないのです。医療経験者や災害ボランティアの人に先ず、
やって頂きたいことです。

これで、集まれる人は「助ける側の人」となれる。

尚、集まらない人は、安全な場所に避難させる。

コーディネーター：高橋民夫さん

被害の大きさにもよりますが、先ず、自分の身の安全の確保が出来ていれば、「おーい、大丈夫か」と家族を確認し、次に「近所の人」の安否を確認する。

冒頭「握手をする」話をしましたが、たとえ隣りの人でも、その家族が何人かも知らない人よりは、
5軒先でも一緒にお茶する人の方が、いざという時には「気になる」ものです。

人間というものは、災害時に「頭に浮かんだ人に集中する = 気になる人」

阪神淡路大震災でありましたが、自分にとって日頃付き合いのない隣りの人は 倒壊した建物の下敷きになって助けを呼んでいても、その声は耳に入らず、しかも目と目は合ったにも拘わらず、それよりも普段から「気にしている 5軒先の人」を探し出し一生懸命に救出しようとしたということです。

つまり、災害時では「気にしている人」以外は、気がつかない心理状態になっているということです。

そのほか、どなたか如何でしょうか。

A：藤田利久さん

今の質問は、全くよく理解できます。

と申しますのは、学校においても学生から“ボランティア”をするには、どうしたらいいのですか？とよく質問されます。そして「心のケア」に関する事が多いです。

このことは、実際に体験した人でないと分からないことだと思います。

学校の心理の教員ですら、やはり「体験したことがないので」とっております。

そうした場合に、参考になるものとして指導教材で「被災者の心の問題」「被災者の行動や心情」など体験談を知ろうというのがございます。

関心のある方は、ロールプレイングなどで学習される方法もございます。

ということでご紹介しておきます。

A：大澤サユリさん

心のケアということでは

災害ボランティアの人は、被災者に絶対言ってはいけない「言葉」があります。

「がんばってくださいね。」という言葉です。なぜでしょう!

被災者は、今日まで大変な境遇の中を生きてきている。つまり「頑張ってきている」。その上何を「がんばれ」というのか。ということになり心を痛める。

でも、被災者の方と一緒に汗水を流している私たち（大澤さん）は、「がんばってくださいね。」といえるのです。

被災者に寄り添い同じ目線となれた時に、はじめて使える言葉なのです。（被災者も素直に受け入れられる。）

逆に被災者の方には、

被災者の方は、災害ボランティアの人に「ありがとう」といわない方がいいのですよ。と教えています。

だって、「ボランティア」というものは、やってもらって当たり前活動なのですから。だからお金などは、あげないでくださいね。と教えています。

ということで、「心のケア」という問題は、実は奥の深い問題だといえます。

A：高橋民夫さん

「心のケア」とは、基本的には「愛」「愛情」なのです。

災害ボランティアをするという事は、「やってあげる」のではないのです。

自分がやりたいから「させてもらっている」のです。

なにもお礼の言葉がもらいたくてやっているわけではありませんね。

あるとき被災したお年寄りのみなさんから、「私たちはもう年寄りだから、地域のために何もできない」と声があがった。

私は、違うでしょう! 「お願いだから考え直してください」そして

「おばあさん、あなたが避難所に行った時に、小さな子どもたちが恐くて泣いていたとしたら、その子をしっかりと抱きしめてあげてください。おばあさんの体温でその子はきっと泣きやみますよ。」

おばあさんだって、できることはいっぱいあるんですよ。という話をしました。

新潟県中越地震の被災地のある避難所（体育館）のできごとです。

東北福祉大学の女子大生が3日間体験学習として被災地のボランティア活動に従事しました。

（第1日目）

おばあさんの避難所生活のお世話をすることになったのですが、なにしろ「言葉」が、かわせなかった。

女子大生としては、被災地の初体験ということで「恐かった」こと。

おばあさんとしては、若い人に世話をしてもらうことが、「申し訳ない」という気持ちがあったのでしよう。

なにも言わないで、ただ「じっと」して黙っているだけでした。

（女子大生）

「おばあさん、私がボランティアとしてお世話をさせていただくことになりましたので、何でも言ってくださいね。」と一生懸命言葉をかけました。

「お水を持ってきましょうか」とか身の回りのことを気かけました。

おばあさんは、ただ黙っているだけでした。

（第2日目）

同じように一生懸命努力はするけど、おばあさんは、ただ黙っているだけでした。

（第3日目）

（女子大生）

「おばあさん、私はこの3日間できるだけのことをしようとしたんですが、もう間も

なく帰る時間となります。なにもできなくてごめんなさいね。「と話したときに

・・・はじめて、おばあさんが涙を流して

「え～、帰っちゃうの、今まで言葉をいっぱいかけてくれてありがとう。帰っちゃうのはさびしい、残って欲しい。」と言葉がやっと出てきました。

ここ数日間の「心の通い」がやっとここで生まれたのだな～とわかります。

つまり、ボランティアをやっていますといろんな事がたくさん起こりますし、報われない事もいっぱいあります。体験とは、そういうものだとして受け止めておいてください。

大羽賀秀夫さん

あさって、建築家の役目として「岩手・宮城」に行きますが、「建物を建て替える・建て替えない」「この家は大丈夫か・大丈夫ではないのか」を全部ひっくるめて専門家の意見を聞きたいというという声に応える為に行くのです。

「こうやって直しなさい」「ああやって直しなさい」「お金はいくらかかります」「融資はこういうのがあります。」というのは、私の役目ではないのです。

「この家はどうやって建て直そうかいね。」という相談に対して、

「おばあちゃん大丈夫、できるよ。」といって被災者の話をじっくり聞きます。

私は、その為に行くのです。

そして「専門家に聞いたら、こう言ってくれたよ。」というのが信頼関係になって行くのだと思います。つまり、中越沖地震の時でもそうでしたが、被災者の気持ちとしては、「元に戻せるよ。」という話を聞きたいのです。

また、その答えが出せない者はプロといえないのです。私はそう思っています。

阪神淡路大震災の時もそうでした。

「がんばってね。」という言葉は避けます。

そして、被災者のいう「この家は、ローンがいくらで、この家を建て直した時にこのくらいの費用が掛かった、でも息子と娘は出て行って夫婦二人どうやったらいいか。」というような話を、ただ一生懸命に涙を流しながら1～2時間じっと聞くだけです。話を聞き終わってから、「でもお父さん大丈夫

だよ、がんばろうね。」と声をかけます。（聞き終わってからの「がんばろうね」は、励みになるのです。）

私、被災者の方に「とにかく、体に気をつけてね。」という言葉が最後にかけています。（被災者と同じ目線・同じレベルになった時に、はじめて声をかけられます。）

コーディネーター：高橋民夫さん

とにかく、「学んでいきましょう。」これから皆さんにとってもいろんなことがあるでしょう。一緒に学んで行きましょう。

次は、早稲田大学災害対策チーム（6名参加）の皆さんから「報告と質問」をお願いします。

Q:早稲田大学災害対策チームの皆さん

(1) 「早稲田発! 楽しい・おトクなまちづくり」ー の報告。

「早稲田大学! 1882年創立 東京都新宿区 学生数約5万人

早稲田のまち周辺立地状況 「意外と似ている早稲田と川口」

神田川、工場、外国人、マンション、木造建築密集地、元気な商店街、元気な若者!

「阪神・淡路大震災発生」 1995年 1月 17日 午前5時 46分

教訓の一つとして「地域の連携の重要性」が叫ばれるようになりました。

(2) そこで、「早稲田」では、「大学周辺七つの商店会（480店）」と連携して地元のまちを元気にしようと活動を開始した。

「楽しいこと」「儲かること」をモットーに!

活動を進めるに当たって、目標にしたキーワードが、

「エコ」って言えば みんな来ぞ! でした。

早稲田商店会・チャレンジの歴史

1996年 エコステーション（当時の空き店舗を再利用して）事業をスタート

事業内容：ペットボトル回収（エコステーションで）、引き換えに「商店会や企業で使える割引券（ラッキーチケット回収機で）」を発行した。

ペットボトルのリサイクルが進み、ゴミ減量の環境対策に貢献できること。

ラッキーチケットで買い物してもらい地元商店会の売り上げに寄与できること。

また、エコステーションでは、近所のおばさんが作った野菜などの販売やリサイクルショップとして地域住民のふれあいの場所となりました。

という事で、この事業は、商店会+ 行政+ 企業+ 学生 が連携して行いました。

この取り組み「ゴミ減量リサイクル」が「まちづくり」へと進化し、マスコミにも注目され、日本中の修学旅行生が早稲田に見学に来るようになりました。

そして、ラッキーチケット回収機は全国 50ヶ所に設置され、早稲田は全国商店街のネットワークとつながりました。

(3) 震災疎開パッケージ(全国商店街震災対策協議会)

このエコステーションでつながったネットワークを利用した次のチャレンジが「震災疎開パッケージ」です。

5000 円で加入する保険のようなもので、震災があった時は全国の加盟先商店会が被災者を一定期間お客様として受け入れ、震災被害がない場合は、一年に一度その商店会から特産物がもらえます。

2001 年には、環境がテーマの「エコサマーフェスティバル」と福祉対策の「エイジングメッセ」を一本化して、「地球感謝祭」とした。大学と地域が連携して行う早稲田最大のイベントです。お祭り雰囲気の中にも、環境や車イスなど福祉や地域のさまざまな課題をテーマにした催し物も行われています。

(4) ここまでは、商店会が中心となって行ってきた活動でしたが、「地球感謝祭」の一環として行われる「防災キャンプ」は、学生団体+ P T A + 商店会+ 消防署が連携して小学生が1泊2日の避難所宿泊体験を行っています。(小学校の体育館で)

「地域のむすびつき」とは
・・・気づきにくい、目に見えにくい、実感が得られにくい・・・ものですが、地域の連携
がしっかりとできていると
災害を含めて、問題が起こったときに柔軟に対応する為の基盤となるものです。

W A S E D A 式

「楽しい」こと。「儲かる！」こと。
誰でも W E L C O M E ! 千客万来!
失敗をおそれないこと
ルールや前例にしばられないこと。
若者の柔軟な発想が重要!

早稲田のように、できるだけ多くの人とつながるといことは、いつ来るかわからない災害に対しても
強くなります。

そこで、先ず「自分の地域を知ること」「自分の地域を見直す」ことから、はじめてみてはどうで
しょうか。

自分自身が、地域のなかに編みこまれていることを知ると地域がもっと面白く見えてくると
思います。
「地域を楽しむことがつながります。」

皆さんは、地域の中でそれぞれにできることをやってみることがいいのではないかと
思っています。
ということで、私の報告をおわります。

コーディネーター：高橋民夫さん

学生さんたちが地域と一緒にがんばっていると、ちょっとほっとしますね。
ここからは早稲田の学生さんと皆さんとで意見交換をして行きたいと思います。

大羽賀秀夫さん

ごめんなさいね。

私たちが今のグループ（かわぐち防災ネット）を、次の世代につなげる活動をして

行きませんと、皆さんの10年後20年後のこの日本に役立つ体制ができないだろうと思います

皆さんにお願いがあるのは、今の早稲田大学の話に出てきました「楽しむこと」「儲かること」、このことはすごく大事なことです。

「儲かること」とは、利益があがるということで、ようするに自分たちにフィードバックするものをどんどん探して行こうということです。

これが、実は日本のボランティアの中に欠けているものなんです。

私たちには、もう知恵がないものですから若い皆さんの知恵を貸して下さい。そして「儲けさせて」ください。どうかお願いします。（笑い）

コーディネーター：高橋民夫さん

今、若い皆さんの立場で「自分たちが悩んでいること」や「抱えてる問題がある」とか、どうでしょうね。

あるいは、報告が終わった早稲田大学生さんは、如何ですか。

A：早稲田大学生さん

パネリストの皆さんではなく、せっかくですから同じ学生の立場の川口市立看護専門学校の皆さんに「地域と一緒に何かされているか」お伺いします。

コーディネーター：高橋民夫さん

では川口市立看護専門学校の皆さん如何ですか。学校祭、学園祭等どうですか。

A：川口市立看護専門学校生さん

市立看護専門学校として、地域と一緒に何かを行うという事はないですが、例えば川口市の「たたら祭り」に参加するとか、町の清掃活動にボランティアという形での参加や、学年によって自発的に行うことですが（毎年決まってやることではない）「募金活動」をやったりとか、しています。

早稲田大学さんの「商店会」とあのような、大々的な活動は、今まで考えもしなかったです。正直いって、すごいなあーと思います。

コーディネーター：高橋民夫さん

こうした機会をもとに、お互いの交流が生まれればいいですね。
そして、お互いが持っているノウハウをやりとりすることで新しい気づきがあるかもしれません。
六大学の間でも、早稲田大学のそういう面での交流はないようです。
こうしてみると、早稲田地域の商店会の取り組みが特別なんですね。

意見のあう人たちがリーダーシップを発揮し、どう動けるかという「実行力」と、も
のごとを続けるという「継続の力」が要ります。ものすごくエネルギーが必要な
ことです。

では、最後になりますが川口市立医療センター（4名参加）の皆さんにお伺いしまし
よう。

Q：川口市立医療センターの皆さん

はい、では質問を2つ致します。

医療センターは、災害拠点病院で救命センターも備えていますが、実際の災害時に、多くの傷病者
が運ばれて来ると思います。が

また、川口市には、ほかにたくさんの病院があると思います。

災害時にはそれぞれが、どんな連携体制が取られているのでしょうか。

A：上山健三さん

はい、全てのケガをした人が、医療センターに行くという発想はございません。

川口市の収容体制として、大規模災害時には、ケガをした人は直接病院に行かないようにしています。

ケガをした人で、ひとりで病院に行ける人は、一人で避難できる。

ほんとうに重傷という人は、一人では避難できないので周りの方々と一緒に
救助されながら学校に避難される。というのが基本です。

学校には、川口医師会の先生方がクルーを作って、それぞれの学校に配置される。救護所を作って
トリアージをはじめます。そうした中で後方病院（拠点）という事が設定されることとなります。

今、何回か医療センターに計画させて頂いて駐車場から「トリアージ」を始めてみたりして、シュミレーションを組んで何回かさせてもらっていますが、直接あのようなイメージになる状態は「避けたいな」と思っています。

県内にいくつしかない病院で、やはり、それぞれの対応を迫られた部分に全力を尽くして行くよ。という体制を取って行きたい。

災害時に、ケガ人が好き勝手にどんどん、医療センター（拠点病院）に入ることのないように、今からこの皆さんは、広く広報してください。行政だけでは、なかなか浸透しないのです。

必ず一か所にまとまらないように、機会あるごとに広報します。

町会の皆さんは、ケガ人がでたらまず、「避難所」に搬送してください。その中でトリアージして行こうと対応を考えています。

昨年、県で決まった事ですが、ケガ人は「避難所」に搬送する事になっています。

コーディネーター：高橋民夫さん

徹底していても被災地でケガをすると、誰もがつつい病院にいきますよね。

だから、この事はよほど広報をしっかりとしないと混乱を来すかも知れませんね。知らない人がいたりして。

A：上山健三さん

この対応は、「地域防災計画」の「避難計画」で決められたことなので、全国レベルでは、異なる場合もあります。注意しなければなりません。

人口密集地区では、この方法を採用しています。

一番避けなければならないことは、「軽傷者に病院を占拠される」ような事態です。これは、あってはならない事です。また、「声が大きい人が勝つ」ような事があってはならないのです。

そのほか守らなければならない事、気をつけなければならない事などがいくつかありますので、整理をしておるところです。

いずれにしても、ほんとうに診てもらいたい人が、早く公平に診断してもらえる体制作りに取り組んでいるところです。

コーディネーター：高橋民夫さん

上山さんは、おなかの中から大きな声でお話されたので、先ず間違いはないと思いますよ。（笑い）
ありがとうございました。

そのほか、何か言い忘れたとか、皆さんの方で言いたい事とかございませんか。

はい、川口市立看護専門学校の方どうぞ。

Q：川口市立看護専門学校の皆さん

看護専門学校の夜間に通っています。昼間は川口市の普通の病院に努めております。が病院の中には、「災害対策マニュアル」もない病院もあると思います。

今日の勉強会のように、企業と行政が一緒になって「訓練」や「勉強会」がもっともっとあるといいと思うのですが、またそういう機会が持たれた時に広く皆に行き渡るようにしてもらいたいのです。がどうでしょうか。

A：上山健三さん

そのことに関しては、「医師会」の方で行われることとなります。

川口の病院は、9つのブロックに分かれていて「災害対応」がつけられている。

何処どこの病院の先生が、「何処どこの避難所で担当される」という一覧表も作られている。

そういう中で「打ち合わせ」や「地区の訓練」は行っている。

但し、これを一斉に行うというのは、なかなか難しいことなのです。

医療センターに「DMAT」はあるのですが、今年は、お願いしません。

「DMAT」は、川口市のものではないから。

また、「埼玉SMART隊」も要りません。

川口市災害対策が一番欲しいのは、川口医師会に入っている医療センターの先生が欲しいのです。

いわゆる三次医療にたずさわっておられる先生は、災害医療が当然できる先生である。しそういう先生は、大規模災害時には、ほんの一握りの存在である。

本当ならば、まちの開業医の先生方が災害医療ができるということが、災害に一番強い体制なのです。

ですから、その体制づくりを目指して、訓練を進めていますが、なかなかまとまらなくて皆さんに報告ができないでいるのが現状です。

底上げを先ずして行こう。という事で取り組んでいますので、皆様のご支援をよろしく申し上げます。

コーディネーター：高橋民夫さん

「防災」という面で、いろんな問題があるという事が明らかになりました。しなるほど、いろんな問題に対してさまざまな取り組みがなされていることもわかりました。

さらに、まだ知らされていない問題もあるんだということもわかりました。

つまり、大切なことは先ず「知る」ことです。

今日お見えになった若い皆さんには、大きな拍手を送りたいし、「いざ」という時に理解度が少し深まっているし、手を携えて歩けそうだなという気持ちになれた事は良かったと思います

本日、会場に来て頂けなかった人たちや多くの若い人たちだって捨てた者じゃない。

被災直後で「いざ」となったら、みんな「温度差」は無く、お互いに「助け合おう」「手を差し伸べ合おう」という気持ちが芽生えます。

だけど3日4日5日、一週間経つと「温度差」が生まれてきます。

「なんだ、あの避難所だけいっぱい物資が届いて、うちは全然届かないで」とか「役所は、向こうの方の事ばかり気を使って、こっちは、何にもしてくれてない」とか。こうした「声」が出始めた時が要注意です。

ですから、「助け合う気持ち」がいつまでも続くようにしなければなりません。

今日、この研修会に参加して下さった「パネラー」の皆さん、そして若者の「生徒学生・医療関係者」の皆さん、さまざまな立場からのご質問やご発言を聞かせて頂き、私たちも知らなかった事柄がたくさんある事がわかりました。

ほんとに良かったなと思いました。

今一つは、上山さんのようにこの職務に長年勤められていることは、地域にとってとてもありがたいことなのです。感謝したいと思います。（会場盛んな拍手）

（この立場の人は、とかく2～3年で交代される事が多く、これは困る事態です。）

いずれ、上山さんが交代されても後輩の方にちゃんと引き継いで頂けるものと期待をしておりますのでよろしくお願いします。

それから本日お忙しい中をこの会場に来てくださり、発言して頂けなかったけれども、熱心に参加して下さった大勢の方々にも拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。（会場いっぱいの拍手）

最後に、「かわぐち防災ネット」の今後一層のご活躍を期待して「防災研修会の場」を終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

閉会

高橋民夫様、上山健三様、藤田利久様、大澤サユリ様、また、川口総合高校・看護専門学校・医療センター・早稲田大学生の若い皆様、そして、大勢の会場の皆様には長時間熱心なご参加を頂きありがとうございました。

災害は、避けることができません。しっかりと「いざ」の時の備えを進めましょう。

以上をもちまして NPO 法人設立「2 周年記念防災研修会」を閉会と致します。



生徒・学生・医療関係者とQ & A

－ みんなで守ろう、わが家(や)、わが町、わが学校 －

7・13「パネリスト」プロフィール

高橋 民夫氏

文化放送：編成局報道制作部所属、防災キャスター30年のキャリアがある。

被災者向け「ラジオ災害情報交差点」が、団体として第1回廣井賞を受賞。

ラジオライフラインネットワーク（東京のラジオ7局）と東京電力、東京ガス、東京都水道局、NTT東日本、NTTドコモ（ライフライン5社）が協力。

上山 健三氏

災害時には、川口市災害対策副本部長としてその重責の任にあたられます。

川口市総務部理事、災害対策室長

川口市の総合防災訓練を指揮監督されている。

藤田 利久氏

埼玉純真短期大学学長、（前）川口短期大学教授

学生に「ボランティア活動」を通して社会貢献の体験をすすめておられる。

川口市のボランティア人づくり基金「市民活動助成」事業の審査員を務めておられる。

大澤 サユリ女史

日本防災士会 災害救援チーム、埼玉レスキューサポート・バイクネットワーク副代表、

05/9 台風14号（杉並区救援活動）04/11 新潟県中越、07/8 中越沖地震救援活動

平時は、各地の社会福祉協議会で講座の講師をされている。

大羽賀 秀夫氏

NPO法人川口市民防災ボランティアネットワーク 代表理事

1級建築士、日本建築家協会災害対策委員、埼玉県被災建築物応急危険判定士、防災士

「市民活動と行政との協働推進懇談会」の副座長を務めている。